近代短歌に現われた子ども（十九）

大塚　雅彦

(41)　病者の歌

明治以降の近代・現代歌人の作品を子ども詠にしぼって個別に見続けてきた。戦後短歌史に一時期を劃した「新歌人集団」の人々まで考察してきたわけだが、このグループの人々も既に皆、古稀前後の年齢を迎えている。その後、歌壇に登場して現在活躍中の歌人は、数限りなく多い。前衛短歌々人などというものも現われている。それらの現役歌人たちの誰を選ぶかとなると迷わざるを得ないし、また、歴史的評価が未だ定着していない向きもあるであろう。そこで個人別はこの辺でとどめ、プロ歌人というよりも、むしろ民衆歌人・庶民歌人の作品ともいうべきものを、幾つかの面で集団的にとりあげ、この長くなった連載を完結する

ことにしよう。むろん、民衆歌人の中にも新聞歌壇に時に投稿する程度のいうなれば無名歌人から、結社に属して歌歴も長く、やや知られた歌人も居る。以下にとりあげるのは、それらを含めて社会的に或る群を成していたり、或る特殊な社会的存在であることを余儀なくされていたりして、現代社会の持つ酷薄な或る断面を短歌によって鋭く提示し、短歌が単に花鳥風月を詠ずるだけでなく、現代社会生活を営むさまざまの人々のうったえを端的に表現するものであることを示す作品群である。

(イ)『試歩路』

病者には歌を詠む人が多い。これは作歌によって、病床の苦しみや闘病のせつなさを支える慰藉や活力を得ている人々が世に少なくないからであろう。病者は短歌結社誌、新聞、一般雑誌等に投稿を続けたり、あるいは歌集を出す人もかなりいる。しかし全国にわたって広く病者一般から作品を集めた歌集というものは、意外に少ない。『試歩路』(昭29・12)はそうしたことに応えて、全国の療養者に呼びかけて作品を集め、年刊療養歌集として刊行したもので、その意味で珍らしいものである。全国の病院や療養所等から多くの所内歌誌や病者歌集が集まった。集まった歌稿は数名の中堅歌人に委嘱して編さんするたて前であったが、本書は主として前掲の中野菊夫が代表としてその衝に当った。そして掲載作家一千三十三名、作品三千九百三十一首が本書に収められた。患者は結核とハンセン氏病(癩)の二つのそれが多いようである(その理由等については歌誌「地表」昭34・4月号所収、拙稿「歌集『試歩路』について」)。結核は戦前は死病といわれたが、戦後は治療の進歩により怖い病気ではなくなった。しかし本書刊行の昭和二十九年度の結核による傷病人員数は、厚生省の調べによると約六百万人であり、これは全種類の病気の傷病人員数の約二割四分強になっていたのであり、やはり相当の数である。ハンセン氏病患者の短歌は、それだけを集めたすぐれた歌集『木がくれの実』(昭28)、『陸の中の島』(昭31)等がこの前後に刊行されたので後述に譲り、ここでは主とし

て『試歩路』の中の結核患者の短歌だけについて見たい。なお、療養歌集はこれを皮切りに毎年刊行される予定になっていたらしいが、その後『無影燈』が出ただけで中絶してしまったようである。

①わが袖にすがりて離さぬ幼子にすぐに癒ゆるとなだめ出で来し（広島療・河内格）

②軽い気持でと長男はいひ二郎無言三郎四郎はさよならといふ（小原療・高田喜好）

①は入院時をうたったものだろう。長期療養を覚悟して、すがる子との悲しい別れ。②は、やや大きな子ども達だろう。四人の男の子の態度が入院する父に対してそれぞれに違うのが、巧みに描き分けられている。かすかなユーモアすら漂よっているが、それゆえにむしろ哀切感が深い。

③抱きあげしこともなき吾子（あこ）と別れ来てひとり療養所行の車待ち居り（小諸療・大島世宗）

これは入院していた作者が自宅に行き、再び病院に戻る折のことを詠じたものらしい。「抱きあげしこともなき吾子」という語が、この作者の長い闘病を語っているようである。

④久々に帰りて見れば暮れて灯のなき間に吾子はぽつねんと居る（佐倉療・高橋喜美枝）

この一時帰宅は一層悽愴である。この作者は他の歌によると、夫に死別し、七周忌が近づいてもなお、この娘と離れて病院で暮しているらしい。

⑤「肺病の子と遊ばない」と言はれ来し子を背に妻は行商にゆく（有珠鉄道病・中谷寅雄）

⑥雨の夜キャバレーに出でてゆく妻を子は井戸端に立ちて見てをり（再春荘・松本東邦）

⑦行商も立ちゆきませぬと泣く妻を子は見守りてをり遊びをやめて（同右）

⑧肺病の子とののしられ杉垣に顔をかくして吾子は泣きゐる（庄内療・丸山政雄）

⑨一枚の洟（はな）紙をうけむさぼりて絵を描くわが子孤児園に見き（久里浜療・湯沢淳）

いずれも患者の妻や子のみじめなさまが描出されてい

る。⑤の妻も⑥の妻も共に行商をし、後者は⑦の歌の如く行商では生計が立たないのでキャバレー勤めに出たのだろう。しかも⑤の妻は子を背負って行商をし、⑥⑦の妻は「遊びをやめて」母を見る子どもを置いて、生計に奮闘せねばならないのだ。⑤と⑧の子どもは共に「肺病やみの子」と友人仲間に罵られている。⑨の子どもは一層みじめで、自分は孤児園に、父は療養所に居るのだ。高度成長時代以前の世相を背景にしていて、社会保障も今ほど進んでいなかったと仮定しても、長期療養者の子どもの悲惨は、読者の胸をしめつける。

⑩子の笑ふ声する家にともる灯を個室の窓よりあかず見つむる（聖テレジア療・伊東節子）

⑪病みてより子に逢はぬこと久しくて抱ける重みもおぼろになりぬ（新潟療・畑山正人）

共に子どもと長く断絶されている悲愁を抑えてうたっている。

⑫今更に堕胎せし子を欲しといふ妻は身弱き吾に迫るも（武蔵野療園・斎藤宗一郎）

⑬眠りたる如き子の顔と思ひつつ小さき柩に釘打ちにけり（下志津病・三井重春）

子どもも安心して生めないことが⑫でわかる。この歌の作者夫妻は離婚するに至っているようである。病の上に貧も加わっているのかもしれない。⑬は愛児の死をうたう。

⑭大人のみのこの病室に小児結核の佐藤文栄が母恋ひて泣く（加茂病・高橋哲也）

⑮病廊に今日も血を売る少女をり一人はうつむき一人は笑みて（松本療・中野貫司）

⑭は、人の子の親が見れば胸つぶれる光景である。この病児を見つめる病室の大人たちも皆病んでいるのだ。

⑮はまた悲惨な状景だ。こんなことがあるのだろうか。共に結核病棟の中の子どもの或る姿をとらえ、不幸が増幅されているのをえがく。

⑯たまさかに逢ひし吾が子にせがまれし短き童話に病む身疲るる（宮城療・高橋敏子）

⑰久々に訪ね来し子になにもなければ療園の蟬とりて

与ふる（漆山荘・松浦双鳥）

⑱見舞来し吾子を吾が抱き丘に坐し夕暮るるまで其の儘に居つ（富士療・望月楠雄）

⑲山みちを歩みて来しと云ふ吾子の小さき鼻の汗ふきやりぬ（広島療・山本千恵子）

⑳寄り添ひて吾がゐる安らぎに夫の背に会ひに来し吾子はいびき立て初む（愛媛療・渡部富美子）

いずれも面会に来た幼児との逢いがうたわれている。病棟に相見る親子像のさまざまな姿に、私は重い感慨にふけらざるを得ない。そして

㉑子の手を引き癒えたる友は帰りゆく公孫樹もみぢの明るき下を（帖佐療・太田雄三）

の退院の歌に、僅かに愁眉をひらく思いにいたるのである。医療扶助や生活保護の断たれたことや断たれるおそれをうたう作品も集中にはある。福祉の充実と向上を希わずには居られない。明治以降の近代文学者たちの「死因ベスト5」は癌・結核・自殺・肺炎・脳出血の順であることを、私は或る本で読んだことがある（佐川章『文学忌歳時記』（昭57・10）が、医療の進んだこんにちでも、文学者ばかりか、名も無き多くの民衆も、結核のみならずさまざまの病苦に呻吟し、罪なき子ども達がその不幸の影響を背負わされていることを、私は忘れたくない。

（ロ）小川正子『小島の春』

数ある病いの中でも特にその症状の無惨さにおいて、また病気のもつ性格の特殊性において、ライ病は戦前では業病のごとくいわれた。ライ歌人として知られる明石海人はその歌集『白描』の扉の冒頭において「癩は天刑である。加はる笞の一つ一つに、嗚咽し慟哭しあるひは呻吟しながら、私は苦患の闇をかき捜って一縷の光を渇き求めた」と述べている。歴史的にも、中国では孔子がライを病む伯牛を見舞って魔訶病と歎いた話がつたえられ、わが国ではライを病む武将大谷吉継が、石田三成との友情のために関ケ原の戦に出陣して陣没した話がのこっている。また、バイブルにはライ病に関する記述が実

に多い。大移動する民族の中にライ病患者が多かったことが推察されるのである。私が子どもの頃、縁日に行くと、鼻の欠けた乞食のような人物が路傍で銭を乞う光景をしばしば見かけたが、今思えばそれはライを病む者であったにちがいない。その後医学が進みプロミンのような良薬が開発されたり、療養所への保護収容政策が進んで、街頭などでライ患者を見かけることはなくなった。しかし、この進歩の蔭には献身的にこの病のためにはたらき、貢献したすぐれた医師や社会事業家の存在があったことを、忘れてはならないだろう。小川正子女史はその一人である。

女史は山梨県の東山梨郡春日居村に明治三十五年生まれた。母くには東京女高師出身の女丈夫型の女性だったという。正子は甲府高女（現甲府西高）を経て、東京女子医専（現東京女子医大）を昭和四年卒業した（人物近代女性史「女の一生」8『人類愛に捧げた生涯』〈昭59・3〉所収、阿部光子「小川正子」による）。卒業後、ライ病院である多摩全生園や瀬戸内海の長島愛生園に就職を希望したが容れられぬ中、昭和七年突然愛生園に現われた。直接談判による就職で、家族を強引に納得させたものという。爾来、ライ治療史では慈父といわれた有名な光田健輔園長の指導を受けつつ、九州・中国・四国等の山深く隠れ住むライ患者を探して歴訪し、愛生園に収容する精力的な活動を開始する。そして、園長の勧めでその旅行記を書きとめて、園誌に発表し、後にそれをまとめて刊行したのが『小島の春』である。この本は昭和十三年十一月刊であるが、ベストセラーになり、私の持っているものは十五年八月で改訂第六刷を重ねている。更にこの十五年には豊田四郎監督・夏川静江主演で映画化され、感動を巻き起した。私は当時旧制高校生であったがこの本を購読しまた映画を見て、ショックともいうべき感銘を受け、私がライ病に関してその後深い関心を抱くに至る最初のキッカケとなった。しかし、当局のライ対策は時局と共にこの頃から温和な方法でなく峻烈となり、「浮浪ライ」の「狩りこみ」が始まり、例えば十五年七月熊本県警は本妙寺集落を急襲し、ライ病者を

検挙し、全国の療養所に分散して送りこみ、ライ集落を焼き払うような暴挙を敢えてした。戦時中は栄養不足や空襲による壕生活で、入園患者の死亡が急増するようになる。一方、正子女史は過労のため肺結核となり、昭和十四年郷里に戻って療養したが、十八年四月、遂に起たず四十二歳の生涯を終った。出身地の村の仏念寺に葬られている（阿部光子、前掲書）。『小島の春』が世人に与えた大きな功績は、ライは人々が信じて来たように遺伝ではなく伝染病であること、従って患者を療養所に送って治療すれば、家族や近隣への伝染を防げること等を教えた点にあるといえよう。なお、ライとこの文を私は書き続けてきたが、実はこの病気はノルウエーのハンセンによるライ菌の発見によって、こんにちではハンセン氏病と呼ばれていること周知の如くである。『小島の春』はヒューマン・ドキュメントともいうべき文集であるが、集中の短歌を若干見よう。

①病む父を持てればか此の児幼くて物のわかりのよろしき児なり

②その母も児も亦病むと吾は診たり診つつ歎かふ深かく来つること

③夫と妻が親とその子が生き別る悲しき病世に無からしめ

④たづね来てのぼる石みち幼な子を抱きて立てる療友を見出でつ

⑤癩患者の児といふ子らの我が前に眼そらせて立つにいとしさ湧くも

⑥幼なきに寂しき笑顔する子らの裸抱へて吾が診たりけり

⑦病児のためによき事と云へ親心幾日悩みてありしをおもふ

女史は医師として山を越え谷を渡り、人里離れた奥にも入って行き、村びとの指弾を怖れてひそかに隠れ住む患者や、この病気の危険さを深刻に感じていない患者を発見し、検診し、療養所に入ることをすすめる。病む父を持つ幼な子のあわれさが詠まれている①や④の歌。母と共に子も同じ病いを病んでいることに愕き胸を突かれ

る②の思い。そして、子どもを隔離収容することがよいことは患者はわかっていながら、不憫がって手離すことをためらって長く悩んだに違いない、とその親の苦悩を思いやる⑦の歌。いよいよ収容に同意して病気の肉親を送り出す折の、残る者との別れ。もう一生帰って来ないかもしれないのだ、愛別離苦の悲しみは、病者とその家族だけに一層深い。「こんな悲しい別れを招くような病気はこの世に無くなってほしい」と念願する著者の思いをこめた③。この③の歌は後に有名になった。⑤と⑥は瀬戸内海の島での啓蒙・医学宣伝活動の一環の歌である。つまり小学校で子ども達の一斉検診をしたのである。「何も知らない私の前に眼を外らせて立つ子があると、それは大抵の場合に癩者の子か、その血族の子だと云ふ事が示される事であつた」と著者は書いているが、そんな子たちを哀れにもいとしくも思って診ている医師である作者の心情がにじんでいる作品である。

⑦なかなかに人集まらぬ校庭に子らまちかねてさはぎてゐるも

⑧映写光(こう)の中に子等のび上(あが)り手をうつし頭うつしてよろこびてをり

⑨金浦の児らの笑顔を忘れかねいささかの菓子贈りてやるも

⑦と⑧は癩に関する啓蒙映画を校庭で見せる野外映写である。村童たちの無邪気な様子が眼に見えるように、その動作がとらえられている。⑨は一斉検診をした金浦集落の児童たちがあまり可愛いかったので、後で菓子を贈ったのだろう。やさしい女医さんだ。

⑩道草を食べたべしつつ学校へ山越えて行く子等に遭ひにけり

⑪からたちの垣に花咲き花かげに朝のうつはを子が洗いをり

⑫学校の行くさ帰るさの子供等に道辺の桃は叩かれにけり

患者捜索・救出行の旅の途中の、こんな行きずりの子どもの姿もうたわれている。そのことがこの女医の心情の豊かさを自ら示しているようである。(この項未完)